

---

# 鴉と悪魔

勝月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>



## 第一話「嫌われ者」

嫌われ者のカラスが言った。

「私は黒く醜い姿で声も悪い。誰もが毛嫌いする。石を投げられ憎まれてる。ほらあそこの子供を見る。こちらを睨んでいるじゃないか。それにあちらの女は私を笑った」

「くだらないな」

呆れるように言うのは悪魔だ。仕立ての良いレトロなスーツにシルクハットとマント、その全てが黒いけれども、瞳だけはアメジストの光をたたえている。

「くだらない？ なぜそんなことを言う。あんたには分からないんだ」

「なぜ？ 俺もそう好かれた存在ではない。人間にとっては同じか、カラス以上に憎い相手ではないか。嫌われ者の気持ちかわからぬでもない立場だ。そう思わないか」

「けれどあなたは上級の悪魔で、姿かたちは美しい。そう、同じ黒をまとっていても、その声は男も女も心地よい気分にならせて、瞳で相手を魅了する。たとえ最後は憎まれても、愛されることもあるじゃないか」

カラスは新たに己を嘲る人間を見つけて、一声鳴いた。

「お前から見た世界はそう見えるのか。だが、俺から見る世界はそ

れとは違う。聞きたいか？」

カラスが見ているのと、同じ人間に目をやって、悪魔は言う。悪魔の言葉に興味を引かれ、カラスはこくりと頷いた。

人間の作った小さな住宅の赤い屋根の上、悪魔は優雅に長い足を組んで座り、そんなカラスをじっと見つめた。

「お前の悩みはくだらない。まったくもって意味がない。世界はお前が思うように、常にお前を見ていやしない。先ほどの子供は空を見上げた方がいいが、太陽がまぶしくて目を細めただけだ。あの女も会話の途中でたまたまお前が目に入っただけで、笑ったのはその相手の話に対してだ。あそこの人間もそうだ。たまたまお前のいる方向に視線が走っただけで、誰もお前を見てやしない」

「そんなことはない。嫌な事を言うな」

「俺の世界を聞きたいかと訊ねたら、頷いたのはお前じゃないか。内容にケチを付けられるいわれはないな」

「あんたに何が分かるという。あんたは私じゃないのに、私が見たものをウソ呼ばわりするんだな」

険しい表情。何かに怯えた声でわめくカラスに、悪魔は肩をすくめた。

「そうだな、俺に一つ分かるとすれば、罪無き者を罪人として話すお前は、嫌われて当然の存在ということだ。さて、これ以上耳障りな歌を囁ささやられてはかなわない。お前も俺を恐れているようだから退散するでしょう」

そう言って、悪魔は微笑を残して立ち上がると、屋根を蹴り、そのまま空に溶けてしまった。

カラスは口の中で呟く。

「ひどい事を言われたんだ。私は悪くない。私は悪くない……」

自分とは違う美しい瞳が心を見透かしたとしても、カラスはそれを正面から受け止めたくはなかった。カラスにとって、世界に真実など存在しなくても良かったのだから。

ああ、あそこにカラスがいるぞ。朝から嫌なもの見ちゃったな。

またカラスのヤツ、ゴミを荒らす気だな！

カラスって怖いよね。執念深いしさ。一度石投げたら、それからずっと追いかけてくるようになったんだよ。

知ってる？ カラスが屋根の周りを廻っていたら、その家で誰かが死ぬんだって。

役所もさつさとカラス皆殺しにしてくれたらいいのにな。あんな黒くて声の悪い鳥、見てても面白くもないし。

「嫌な声が聞こえるのかい？ それがそんなに気になるか？ 醜悪な人間の声に惑わされてやることはないのに、確かにお前を愛する

者たちも存在しているのに、自らを醜悪だと認めるお前は、一体何がほしいというんだ」

うるさい。うるさい。うるさい。うるさい。うるさい。

カラスは両の翼で顔を覆った。蔑まれる悲しさを、否定される痛みを、何者にも屈しない強い存在が理解できるはずはないだろう。

あなたは悪魔なのに、美しいものをたくさん持っていて、自信に溢れているから、悩みをくだらないと一笑できるだけだ。私と同じカラスであれば、お前だつてきつと私と同じになるはずだ。

ああそうだ。私はお前になりたい。お前のような悪魔になれば、きつと誰からも蔑視されることもなく、幸せになれるはずだ。自分で自分を消してしまいたいこの気持ちから、必ず解放されるはずだ。

私は悪魔になりたい。罪を背負っても、笑っていられる者になりたい。

カラスのままですべてを啄ばめば、浅ましいモノに墮とされる。悪魔として死体を喰らえば、何者も私の力を認めるだろう。

私は私を変えたい。

けれど、どうすれば、自分を変えることができるのだろう。

あれからカラスの目の前に現れることのない悪魔。自分の現れたいところに現れては消え、特別にカラスを見ることのない悪魔。

カラスは黄昏の、薄闇広がる空へ向かって鳴いた。

どうか悪魔よ。今一度私の声を聞いてくれるというならば、あの屋根の上に現れてくれ。私はどうしても、どうあっても、カラスでなくなりたいのだ。

## 第二話「願う者」

赤い屋根の上にはティーセット。バラの花びらを浮かべた紅茶にシユガーを一つ。ゆっくりとスプーンをまわして溶かすと、そつとティーカップの縁でスプーンの滴を落とす、皿へ戻す。悪魔は美味そうに香りを堪能してから、やっとカップに口を付けた。一級品のチーズで作られたチーズケーキにも満足気だ。

カラスはまさかそんな風に自分を待っているとは思わず、戸惑うように近くの電信柱の上にとまった。

「悪魔よ、何をしているんだ。そんなところで」

「お茶会のつもりだが、カラスはこういったものは食さなかったかい？」

「私にあんたに謝ろうと思ってきたんだ。この前のことはあんたの言う通りだった。だけど私にあんなことを言ってくれる者は、あんたが初めてで、ショックを受けてしまった。反省している」

「ほお、それは良かったじゃないか。見られてもいない者に見られたと思えば、嫌な想像をしなくても良くなれば、お前は少し、幸せになるだろうよ」

幸せになる。

悪魔が口にしていい言葉かどうかはともかく、カラスはそれに突き動かされて、悪魔の隣に降りた。そんなカラスの目を悪魔はのぞきこみ、チーズケーキの皿に乗ったチェリーを、カラスに寄こして



きた。

「願いがあろう。それをこの俺に言いつもりなのか。酔狂なことだな。俺はあまり、お前に役立つとは思えないが」

「私に真実を語る者はお前だけ。悪魔であつてもそれはいいんだ」

「俺は真実を語りすぎる。強い毒は死を呼び込むだけで、扱いを知らぬ者の前では、決して薬にならないのを承知しているのか？」

魂と交換に願いを叶えると噂される悪魔が、やけに慎重な態度を取る。それに苛立ちながら、カラスは負けじと悪魔の美しい瞳を見つめ返した。自然と涙が零れ落ちる。

「私は自分を変えたいのだ。卑屈に自分を貶めたくない」

「性格を変えたいと？ それはまた難しい願いだな。困難も多いだろう」

「あんなのように強くなりたいんだ。自信を持てるようになりたい。そのためなら困難も乗り越えてみせる」

泣いて泣いて声を詰まらせながら訴えるカラスは、恐れていた悪魔のまっすぐな瞳も見えなくなるほど、視界を涙で曇らせた。見ても何も見えない世界に、カラスは大声で叫んだ。

これ以上本気で望んだ事などない。魂が震えるほどソレが欲しいのだ。

「どつやら本気の願いらしいな」

激しく泣いて嗚咽を漏らすカラスを電信柱から下ろして抱いてやると、頭をなでて、悪魔は優しく笑んだ。いつそ神の使いにすら思える。

だがそれとは反対に、口調はやや厳しく、悪魔は条件を提示した。

「協力してもいい。ただし、俺はお前が聞きたくないような事を限りなく話すだろう。お前が今まで気付こうとしなかった、お前が嫌悪される理由の数々を、俺は包み隠さず教えていく。それでもお前は私を信用し、信頼し続ける事ができるのか？」

「それは分かっているで頼むんだ。真実を教えてほしい。それを聞いて私は私を変えていくから」

「俺は目的のためなら、お前にウソもつくし手段は選ばない。それでも？」

「私は絶対に信じるから、お願いだ」

「俺は悪魔だ。俺の囁く言葉のために、お前が壊れることもあるだろう。覚悟はあるのか？」

「ある」

カラスは必死に声をふりしぼった。今を逃せば二度とないチャンスに思えるのだ。

ほんの数秒、悪魔は顎に指をあて、考えるしぐさをして見せたが、やがてカラスを両手で抱き上げた。

「では俺はその言葉を信じよう。これ以後、今日のお前を信じ続け、決して俺からは裏切らない事を誓おう」

儀式のように宣言をして、悪魔はカラスの額に、形の良い唇を押し当てた。契約のサイン代わりに。

カラスは何度も死のうと思ったことがある。

住宅の窓ガラスに突っ込んでみたが、いざとなると加減をしてしまい、軽い傷しか作れなかった。

「自殺未遂？ それはそれは」

その傷を見ても、悪魔は眉一つ動かさなかった。それでも、この悪魔の特徴的な紫の瞳は、カラスを侮蔑していた。

「私はイジメにあっていた。同じカラスの仲間にも好かれず、他の動物達にもバカにされて、とても辛かったんだ」

「ならば、きつちりと死んでみせてやれば良かっただろう」

「え………？」

「何度も同じことをしてみたけれど、死に切れなかった。それは、同情を集めたいだけの行為だ。誰かに、自分がどれだけ不幸かを、知って欲しいというだけだ。お前には、命をかけて振り向かせる気力もなければ、全てを自分勝手に捨ててしまえるほどの、絶望もな

い。あるのは自分への哀れみ。常に被害者であることへの執着」

「けれど、私は確かにイジメられてきたんだ。突然蹴られる辛さが分かるか？ 殴られること、仲間はずれにされること、この土地に移るまでの間、どれだけ私が悲惨な目にあつたのか」

「カラス。お前は本当にバカだな」

悪魔の無神経さに、カラスは一瞬、言葉を失った。

誰かに蔑まれた者を、悪魔はバカだと決め付けるのだ。

「私をバカにするのか。私は本当のことを言っているだけなのに」

「ならば問う。移り住み、以前のお前をここでは誰も知らないというのに、なぜお前は友人になった者を影で悪く言いふらし、見知らぬ者まで自分を侮蔑していると決め付けた？ お前はその点においても被害者でいるつもりなのか」

からかうような口調で悪魔はカラスの急所をついた。カラスの視線が泳ぎ、反論をどうにか構築する。

「ずっと見下げられてきたから、友達だと思つても信じてあげられない。仕方ないではないか」

「仕方ないですまされる方は、たまらないだろうな。今の友人は過去にお前をイジメた連中じゃない。それをお前の私的な恐怖で恐れられ、裏切られているのでは、お前を嫌いになつても無理はない。お前が今の友人に嫌われるのは、そのためだ」

「だって」

「被害者がいつまでも被害者でいられるワケではない。いつだってどちらにもなれるのが、命ある者の運命なのだからな。お前は変わりたいのだろう？　ならば、そういう事実を自覚することだ。そうでなければ、お前が誰かに好かれるはずなどないと知れ」

悪魔の言葉は、研ぎ澄まされすぎた剣だ。まったく隙を作らず、的確にカラスの心臓を狙う。あまりの痛さにカラスはうなだれた。

「私は醜いと嘲られたんだ。姿が、声が、存在が醜いと」

「それはお前の口癖で、最大の言い訳だ。この世の醜き姿のモノ共が、全てお前と同じように殻に閉じこもり、世界を呪ってはいない。それどころか、多くの者を救う光となる者も数多い」

ふと気付いたように、悪魔はうつむいたカラスの顔をのぞいた。

悪魔はよく瞳をのぞきこんでくる。のぞきこまれると、カラスは自分の心の内が全て、悪魔の紫の瞳に暴かれてしまふという恐怖と不安に、否応なく飲み込まれた。

何かに選りすぐられた者のごとく、悪魔は万人の認める美声で悪夢を囁く。

「お前の姿は確かに醜い。だがお前は、私は醜いと自分から口にすることで、それを否定してもらおうとしている。本当は表に出すほど自分を恥じてはいない。なぜならお前は、お前の過去を知らない他者に哀れっぽく昔を話して聞かせれば、皆信用して同情を投げかけてくれることを知っているからだ」

「そんなことは……!」

言葉に詰まる。

「否定をしても無駄だ。お前の心は実は自覚しているじゃないか。ずっと前から分かっているんだろう。それを言われて思わず首を振ってみても、俺の言葉を覆せはしないんだ。これはお前の中の真実だから」

悪魔は少年のごとく無邪気に笑った。

「そして俺を怖がっているな。そんなに怖いかな？ 真実と相對せずに、どうやって自分を変えるつもりだ？ お前の心は渦巻いている。俺には見える。俺には分かる。俺に全てを言い当てられ、逃げられなくて、それでも逃げ場を探して足掻いている」

「やめて、やめてくれ!」

カラスは溢れる涙を止める事ができない。醜さを、汚さを、露呈する涙だというのに。

「俺はやめない。たとえお前に嫌われようと、俺は俺の役目を果たす。お前にない覚悟なら、俺はすでに持ち合わせているんだよ」

「あんたの瞳が怖い。全てを見透かされるのが怖い」

「汚いお前が暴露されるから？ 俺はもう、お前がどれほど醜悪かを知っている。気にするな。だがな、いいかカラス」

精神の汚泥を流し続けるカラスを、視線で捕らえたまま、悪魔は得意げに断言する。

「お前の心の奥底の、美しい光が俺には見えているんだぞ」

それは、何億光年も先にある星の光ほどに遠いが、確かにそこで、自ら輝いているのだ。

### 第三話「望む者」

カラスは少しだけ変わった。中身のない笑顔をやめて、心から笑える努力をし始めた。

相変わらず悪魔の言葉は、時に刃物のようではあるが、悪魔の言う通りに考えていくと、ほんの少し道が見えてきた。

そしてカラスが、誰彼かまわず文句を言うクセを直すと、悪魔は色とりどりの花束に似た、褒め言葉をプレゼントしてくれた。

カラスは悪魔の友人にも会った。敵対するとされる天使、愛らしい妖精や、あるところでは神とも呼ばれるモノがいた。皆カラスに、裏のない笑顔を向けてくれた。

「あいつは風変わりな悪魔だね。魂と願いを交換することがない。願いを叶え終わるまでの悪念を喰うことで満足するらしい。君は運がいい。その願いを忘れなければ、あれほど協力的な者もないだろう」

「あの子はおなたをたくさん傷付けるでしょう、全てはあなたの望みのため。その分ばかりにくい優しさを理解できた時、あなたはきつと救われているはずよ」

「とは言っても、これまでほとんどの者が、悪魔の言葉を信じきれずに去っていったがな。アレのことを信じられる奴など、ほとんどおらん。何せアレは悪魔だから、あやつから己が弱さで逃げる時も、悪魔だという理由で裏切りやすい。誰に対しても、悪魔に騙されたと言えばすむ。自己弁護しやすかるう」



天使や妖精や神が、口々に好き勝手なことを言ったが、カラスは悪魔を信じる自信があった。あの強烈な毒は誰にでも受け入れられるものではないが、自分は悪魔を理解できる。

だから、カラスはニコニコと彼らのおせっかいを聞いていられる。

何より、悪魔を好きになることで、特別な存在である彼らにも好かれている。誰かを憎んでいる間は得られなかった何かが、すでにカラスの両翼の中にはあった。

誰かに好かれるのは心地よい。誰かに好かれれば自然と笑顔になり、多くのものを慈しめた。感じた事のなかった満足感に満たされて、悪意に食い尽くされていた世界は、良心の連鎖により、思ってもみなかった楽園を与えてくれた。

これも全て、悪魔のおかげだ。

カラスが感謝すると、悪魔は不思議そうに言った。

「それはお前が頑張ったからだろう？」

「あんたが私を変えてくれたんだよ。あんたの言葉は怖いけれど、それに目を向ければ向けるほど、自分を変えることができる。だからあんたのおかげだよ」

「それは違う。確かに俺は協力しているが、努力はお前のものだ。自分が頑張って手に入れたなら、それはお前自身のおかげだ。変わることを選んだお前の努力の成果で、俺が讃えられるいわれはない」

素直じゃない奴だ。カラスは悪魔の屁理屈さえ、愛らしく思えた。

「では私は感謝を何で示せばいい？ 私は悪魔の役には立てていないし、そもそもカラスでしかない私があんたに恩を返す事は難しい。確かに私は私の努力で変わったのだからうけれど、悪魔の言葉なしに変わるわけがなかったのだから、その分の感謝くらいはさせてほしいんだ」

一生懸命言葉を選んで言ってみると、悪魔は肩をすくめた。

「カラスでしかないなどと、自分を見下げる発言は気に入らないが、お前が感謝するというならば、態度で見せてくれたらいい」

「態度？ それはプレゼントをするとか、そういうことかい？」

「そんなものはいらない。俺はただ、カラスがカラスの理想を叶えてくれればそれでいい。自分の責任において、強い自分を手に入れる姿を見せてくれたなら、それをお前からの礼として受けよう」

それではあまりにも、カラスに得ばかりではないか？

と、カラスは思ったけれど、何を言ってもその手の返答をされそうで、約束だけを口にした。悪魔と口論しても勝てるはずがないし、この悪魔は本当にそれ以外のものを望んではいないようだった。

ふと、カラスは気になっていたことを訊ねた。

「他の悪魔はどんな風なんだ？ 普通、悪魔といえば、悪逆の限りを尽くすイメージだけれど、あんたはお人よしに思う」

悪魔はシルクハットの位置を直して、口の端だけで笑った。

「悪魔は己の心のままに生きるのが常ならば、悪魔らしからぬ、とされようとも、やりたいことをするのもまた真実の姿だろ」

悪魔と親しくなればなるほど、カラスは自分も悪魔になりたいと強く望んだ。悪魔になれば特別な力が手に入る。自分の思うがままに生きられるのだ。

人間の子供が毎日やってくる大きな建物の、一番高いところで、悪魔は相変わらず紅茶を飲んでいた。紅茶の上にのせた生クリームに、ナッツを粉にしたものをかけ、香りを楽しむ姿は優雅だ。

カラスは悪魔の目の前に降り立つと、思い切って言った。

「相談があるんだ。聞いてくれないか」

「お前はいつもティータイムに相談事を持ってくるんだな。今回は何だ」

言い方は不機嫌そうだけれど、悪魔は口が悪いだけだとカラスは知っているので、かまわず続けた。

「私も悪魔になれないだろうか」

「カラスが悪魔に？ 表面が黒いだけのお前が、中身まで黒くなるうというのか？ 意味がない。なぜそんなことを望む」

「私はより多くの者の役に立ちたい。あんたのようにね。だから悪魔になりたいんだ」

「そいつは呆れたな」

今度は本当に言葉の通りに呆れたらしく、ため息までつかれてしまった。

「呆れることはないだろう」

「呆れるさ。お前は悪魔がなぜ悪魔であって、どう生まれるかも知ろうとしていない。望みだけを口にすれば俺が叶えると思っているのか。心の底から何かになりたいものは、その全てを知ろうとするけれどお前からは、一度だって悪魔についての質問を、受けてはいないと記憶しているが、どうだ」

カラスはそこまで言われると、言い訳も頭に浮かばなくなった。周囲の者達が語る悪魔の話の聞いただけで、悪魔の全てを知ったつもりでいたのだから、責められても仕方なかった。

とはいえ、そんなに怒られる内容でもないだろうと思うので、カラスは少々ムツとする。

「じゃあ、それを私に教えて欲しい」

「その前に礼儀を学ぶことだな」

悪魔はそっぽを向いて、今は話す気がないことを示した。

いちいち注文の多い悪魔だと、カラスは舌打ちをした。仕方なく

カラスはその場を去り、悪魔の、そして今は自らの友人でもある神のところへ飛んだ。

神は一通りの話を聞くと、腹を抱えて笑った。

「悪魔になりたいとな！ 風変わりなことを望むカラスがおったものだ。人の役に立ちたければ、悪魔だけは選ばぬと思うものだが、一体いかにしてその望みを持ちえたものか。おまけにアレはいたってクソがつく真面目な性格をしておる。誠実さを求められるは通りだろうよ」

「私は本気で望んでいるんだ。本気の望みを悪魔は聞くと言ったのに、約束を違えているのは向こうじゃないか」

「ふむ。カラスは我が我がとよく叫ぶことよ。人にものを頼む時、教えを請う時、そのように頭が高くては嫌われもするわ」

「……つまり、悪魔は私を嫌って話さないと？」

「アレはあいにくとその程度で嫌うほど、単純な悪魔でもない。カラスが誠実に求めるならば、今すぐにもアレは、望むことに協力を惜しまぬ」

カラスは胸に重い何かを感じた。変わったかと思っていた自分が、まだ一つも変わっていないのではないかと疑った。

自分はまた嫌われるのだろうか。目の前の神はどうだろう。声の汚い、醜い黒い鳥を、嘲笑してはいないだろうか。

だが、神は満面の笑みを浮かべて、悪魔に謝ってくるよう、うな

がしてきた。

#### 第四話「知ろうとする者」

「本気」の意味が分からなかった。

カラスは確かに、真実、「悪魔になりたい」と望んでいる。賢く強く、誰かに必要とされる存在になりたい。あの紅茶好きの悪魔のような存在に。

悪魔はカラスが「悪魔について何も知らないくせに」と言ったが、「悪魔」がどういう存在であるかくらい、カラスだって理解していた。

悪魔は悪しき方向へと人々を誘い、墮落させる。

けれど、カラスの知っている悪魔はあの悪魔一人で、これまで思っていた悪魔とは違う。一般的に言う悪魔になりたいのではないから、悪魔について今さらどうこう聞いても仕方ないはずだ。

カラスは一晩考えた後、その疑問を悪魔自身にぶつけてみた。常日頃、悪魔は分からない事は質問しろと言っていたからだ。

「結論から言うと、やはりお前は悪魔になるべきではないな」

「なぜだ」

「お前は自分を変えたいと言った。お前の言う悪魔が俺のことならば、俺のようになることとお前が自分を変えることは別だからだ」

「……………」

「誰かのようになるのではなく、お前が望むお前にならなければ意味がない。お前が世俗的な悪魔になりたいと願うなら、方法を考えやらない事もなかったが、俺になりたいのならやめておけ。俺は俺にしかねれぬ。お前もお前にしかねないだろう」

「ではどうすればいい。私はしよせんカラスにすぎず、お前のように特別な力もない。誰かを助けて必要とされるには、材料が少なすぎるんだ」

自分に自信だけはまだ持てそうにない。

「お前は見当違いをしているんだよ、カラス。今のお前が無力なのではなく、無力だと思っているから無力なんだ。言い訳を考えている内は、望みを叶える事は難しい。お前がやるべきは、あらゆる真実を貪欲に知ろうとすることだ。必要なものは多すぎて、自分に不要なものを探す方が、うんざりするほど大変なんだ」

「そう言われても、私はそんなに強くない。お前のように強くないんだ」

「……お前は悪魔の能力を手に入れられれば、それで強くなれるというのか」

「ならば、あんたはどうなんだ。悪魔であるからこそ強いのではないのか？ その力が無くても自信を持っていられると？」

カラスがきつと美しい鳥であったなら、誰からも愛されただろう。この根暗い感情が生まれる要因もなく、人間に追い立てられることもなかった。心が萎縮することも。



「今と同じ自信でなくとも、また別の自信を得る。個性の形が変われば、お前はただの黒い鳥ではなくなる」

「あなたは強いからそう言うのだ」

「だが、お前はそう言い切れるほど、俺のことを知らぬだろう。確かに私は強いけれど、誰しも苦難を乗り越えて手に入れるものではないか。労せず力のみを手に入れようとは、厚顔すぎる」

悪魔が言う事はもつともだった。カラスは悪魔の過去を何も知らず、出会って半年もたっていない。その間、一度も悪魔は自分から過去を話したりはしなかったし、カラスも訊ねなかった。自分のことしか考えていなかったのだ。

苦難。物事に対して常に余裕の態度である悪魔にも、苦難がある  
と？

「あなたはその苦難を乗り越えたのか？」

「俺の場合は壊れたのさ。そして甦った」

「壊れたってどういうことなんだ」

「そちらのやり方はおすすめじゃない。参考までに聞きたいと言うならば教えてやるが、話が長くなる」

「長くなってもかまわない。教えてくれ。あんたが今のあんたになるまでの話を」

カラスが懇願すると、悪魔は指をパチリと鳴らした。赤い色の鷹に似た鳥が、ティーセットなどが入った籠を両足で持って飛んできた。

人間たちは、悪魔に付き従う生物は黒いカラスや猫だと思い込んでいるが、この赤い鳥こそが悪魔の使い魔である。人語を操り、悪魔に忠実だ。

鳥から籠を受け取った悪魔は、常と同じく紅茶を用意して、カラスには果物を分けてくれた。痛みをともなう過去を話すというのに、悪魔はどこまでも優雅さを忘れない。

けれど空を見上げた悪魔の瞳は、遠く、遠くを見つめていた。

## 第五話「聖なる者」

神は信じるもの達の信じる姿で存在している。その事を人間は知らないが、多くの生き物は知っていた。

現在の悪魔の友人の神などは、ごく少数の村人が今も守る社の神だと言っていたが、悪魔が最初に見た神は、唯一無二の絶対神と、人間からは思われていた。

その頃の悪魔といえば、白い翼を持った天使だった。天使の頃の悪魔の仕事は、神の意思をあらゆる生物へ届ける事。また、生物達の行いを神に報告する事だった。

悪魔は幼き子供の嘆きに耳を傾けた。

「ママが死にそうなの。お願い神様。ママを助けてください。苦しみを消してください」

神はそれを哀れに思い、願いを叶えてやるように言った。

「神はおっしゃった。あそこに見える崖の上にある薬草を煎じて飲ませれば、お前の母親はきっと助かるだろう」

言葉通り、子供が傷だらけになっても取りに行った薬草で、母親は助かった。悪魔は喜び、子供の神への感謝を報告すると、神は満足気に微笑んだ。

しかし数日後、子供は死んだ。

同じ村に、母と同じ病で倒れた者のため崖へと向かい、足を滑らせて落ちたのだ。

「何と哀れな子供だろうか。しかしその行いは美しく、魂は汚れを知らぬ純粹さ。天の国の門を開き、またいつか生を得るその日まで、樂園を与えよう」

神の意思に従って、悪魔は子供の魂を天へと運んだ。残された母親は嘆き悲しみ、絶望から這い上がる事もできぬまま、孤独な人生を送った。

また別の地で、悪魔はさまざまな動物が、人間の矢に倒れるのを見た。人間達はそれを遊戯として楽しんでいるが、射られる動物からすればただの虐殺である。

「神よ、なぜ人間は食しませぬ命を殺し、笑っていられるのですか。あれは悪魔の所業に思えます。人の行いは、いつも悪魔に似ている」

「悪魔と、悪魔に近い人間を嫌っているのか？ 人は物質世界での頂点。善悪共に持ち合わせてはいても、制御できずにさ迷っている。そのため、自らをも焼き尽くす人の魂を導くことこそ、またお前の仕事であるぞ」

悪魔は一心不乱に仕事に打ち込んだ。多くの嘆きを耳にしては、神との橋渡しをしてやり、時に悪魔と戦い、やがて疲れ果てた。

確かに救っているはずなのに、悪い結果が出ることも多い。そのたびに精神は疲弊した。

そんな悪魔の目の前に、一人の美しい少女が現れた。慈愛に溢れ、どんな時も微笑みを絶やすことがない。決して見返りを望む事なく、正直に生きる少女の姿が、悪魔には特別貴重なものに見えた。

悪魔は少女の成長を見続けた。少女は幾つになっても心の美しさを失わず、それどころか輝きを増していった。慎ましく、神に祈りを捧げ、まっすぐな少女は皆に愛された。

いつの頃からか、少女は悪魔に気付いて声をかけるようになっていた。悪魔が他の誰にも見えない存在であることは承知しているのに、森の決まった場所で、誰もいないことを確かめて、少女は悪魔に話す。少女の、村人たちへの唯一の隠し事で、特別に大切なひと時だった。

「天使様、今年は豊作になりそうなんです。きっと秋のお祭りは盛大になりますわ」

「それは楽しみだな」

「来て、くださいますか？ お祭りの時に私、とっておきの幸福をお伝えできるんです」

「とっておき？ ならば来ないワケにはいかない。約束しよう」

少女はこれまでで一番の笑顔を見せてくれた。

約束の秋になり、村は天候に恵まれ、実った作物の豊富さに喜び、いつにも増して盛大な祭りを催した。

軽快な音楽にのせて踊る村人たちの中には、少女の姿もある。子供達は駆け回り、男達は酒を酌み交わし、女達はおしゃべりに花を咲かせる。夜になっても賑わいは途切れる事がなく、悪魔はながめているだけで楽しかった。

大きな炎が焚かれ、祭りも最高潮に盛り上がると、一人の農夫が壇上上がった。

「うおおーい、我が愛する村の仲間たちよ、よっく聞けよ」

「なんだなんだ。へたな歌でも聞かせるつもりか、おい」

「うるせえなあ。歌ならあとで嫌でも聞かせてやるさ。まあまあ静かに聴け兄弟」

軽いヤジに悪態をついた年配の農夫は、全員の注目が集まったところで、ニタリと笑う。

「我が息子と我が村の天使が、ついに結婚する事になった！ 悪いな悪たれども！」

村の端まで聞こえそうな大声で農夫が言うと、半瞬静まり返った村人達は、わあっと歓声をあげた。周囲の村人達が、少女と少女の婚約者の腕を引っ張り、背を押して、農夫と同じ壇上にのぼらせた。あちらこちらから、祝いの言葉とからかいが飛んでくる。

ああ、これが。

悪魔は少女の言った幸福に納得をして、こちらに気付いた少女に向かい、その白い羽根を一枚飛ばした。羽根は少女の耳元ではじけ

て消えたが、驚いた表情をして、それからゆっくりと、これまでで一番の笑顔のあと、涙を流した。

「おめでとう。君の一生が幸福でありますように」

少女の耳にだけ、優しい悪魔の声が聞こえたのだった。

それは、少女のおかげで心が癒された悪魔の、ささやかなお礼であつた。

「素晴らしい少女だ。もしその少女が助けを求めてくる事があれば、お前は迷わず少女を救うが良い」

神の命がなければ動けぬ天使だが、神から許しを得て、悪魔は少女が、やがてその心そのままの美しい女性に成長していく様子を見守った。少女や少女の夫に似た子供達も生まれ、また健康に育ち、幸福な時を過ごしていた。

## 第六話「涙する者」

年月が過ぎ、少女の一番上の息子が十歳になる頃だった。少女の夫の父、あの祭りで二人の結婚を発表した農夫が、嵐の夜に大怪我をして倒れた。意識は戻らず、村にただ一人の医者も助からないだろうと言った。

「天使様！ 天使様、いらっしやいますか！」

必死の叫びが、降りしきる雨の中で響く。悪魔は聞いたことのない少女の声に驚いて、すぐに姿を現した。

「義父を、義父を助けてください！ そのためなら私の命と引き換えにしてもいいんです。お願いです、天使様」

「落ち着け、大丈夫。君の心の叫びは神に届いている。神は私に、君が助けを求めたら救うようにおっしゃられた。すでに君の義父に忍び寄る死の闇は打ち払った」

「ほ………本当ですか」

「私は天使だ。ウソなんてつかないよ」

「ああ、あああ天使様、天使様！」

小柄な少女の体を、悪魔は優しく抱きしめて、あやすように背をなでてやる。

「けれど、本当に彼を救うのは君だ。先ほど、神より命を受けた。



君には癒しの力を授けよう」

「え？」

「神の力、その一滴とはいえ分け与えるのだから、これは君の愛する人々のために使つて欲しい」

悪魔は少女の体を放すと、羽根を一枚彼女の中へと飛ばした。少女はこみ上げる熱さを感じたが、それもすぐに消えた。

「彼の苦しみを取り除いてあげなさい。君が願えば、神の力が君を助ける」

少女自身、魂に宿つた力を感じているのか、礼を言つと急いで家へと戻つた。

農夫は少女にとって本当の父親に等しかった。少女が10歳の時に、両親が相次いで病に倒れた。悪魔が少女に出会つたのはその直後からで、村人は皆少女を愛しんで育てたが、とりわけ農夫とその家族の愛情は深かった。

少女が祈りの言葉を唱えながら農夫の手を両手で握ると、農夫の傷は見る間にふさがり、苦しみに呻いていた顔はおだやかさを取り戻し、静かな寢息を立てた。家族も、集まっていた村人も、奇跡を目の当たりにして驚いたが、皆が愛する慈悲深き少女が、神に認められたのだと納得をした。

それからの少女は、医者ではどうすることもできない病人・怪我人を癒してまわつた。天命のために死んでいく命を救う事はできないが、生から死へと転じるまでの痛みと苦しみを取り除き、安らか

に天へと送ってやった。

噂はやがて、周辺の町にも広がり、少女の日常は変化した。

けれど、少女の人格は純粹なままだった。裕福ではないので、隣の村や近隣の町へ行くため、必要最低限は依頼者をお願いしたが、報酬の金銭は受け取るうとしなかった。少女の家族も、神に感謝する日々を大切にした。

少女はより多くの人々に愛され、慕われた。少女も皆を愛し、救い続けた。少女の一生は、このまま愛の中で満たされて終わるだろう。誰もがそう信じていた。

少女が神の力を得て、三年が過ぎていた。村に似合わぬ豪華な馬車が少女の家の前で停まり、そこから身なりの良い紳士が降りてきた。紳士は他の客と同じく、病人を治して欲しいと願い出た。

「私が神より頂いたこの力は、必ず命を救うものではありません。神がその方をお召しになる時、私は死の苦しみを癒すことしかできないのです。それをご承知下さいますなら、私は協力を惜しみません」

紳士はうなずき、彼女は馬車に揺られて彼の主人の城へと連れられて行った。城主が突然病に倒れ、さまざまな治療をすれども効果がなく、絶望しているところへ少女の噂を庭師が町で耳にした。

少女は城主の病を癒そうと祈った。城主の苦しみは徐々に去っていくが、顔色は一向に戻らない。

やがて少女は城主の家族に頭を下げた。

「申し訳ございません。私ではお命までお救いすることは、できないようにです」

こういう時、いつも少女は心が張り裂けそうになった。少女を頼り、愛する者が救われると信じ、結果的に失ってしまうと知る時の家族の叫びは、聞くに堪えない。

頭を下げる少女に、城主の妻は震えながらわめいた。

きつと助けられるはずです。助けられないなんてウソ。そうだ、お金がほしいのでしょうか。いくら欲しいの、言いなさい！

どうしてなの。神の力を持っているのならば、助けられるはずじゃないの。確かに苦しみを取り除いてみせたけれど、死なせてしまっただけなの。

ああ、そうか、そうなのね。神の力だなんて言っているけれど、本当は魔女の力なんじゃないの。そうよ、そうなのよ、あなたは魔女であって聖女じゃないのよ。

ほら、死んでしまった。私の大切なあの人が。許さない。あなたが私の夫を殺したのよ。この悪魔、魔女！ 私はあなたを訴えます。そして、真実の神の元で裁かれて死ぬといいわ！

少女は城主の妻の訴えで、裁判にかけられた。どれだけ少女を慕う人々が少女を救おうとしても、教会は少女を魔女と認めて牢屋に入れた。

「なぜだ。なぜ人間は正しい者を殺そうとする」

「天使様、嘆かないで下さい。これもきつと神のご意思なのですから」

「神はつ……………」

悪魔は真実を言おうとして、口をつぐんだ。

神はこの惨状をお嘆きになられている。

神の意思だと信じている少女に、神も自分と同じく嘆いているだけと言つのは辛かった。少女は多くの人々、他の生物にいたるまで愛し、守りながら生きてきたというのに、その少女の命を救えない自分には、少女の想いを否定する事はできなかった。

「天使様、私の最後の願いは聞き届けられるでしょうか」

「ああ、私が必ず伝えに行く。何でも言ってくれ」

最悪の状況下にあるはずの少女は、子供の頃から何一つ変わらないう優しい微笑みを浮かべた。

「私の大切な子供達を、家族を、私の代わりに見守っていてほしいのです。天使様に」

「そんなことで、いいのか？」

「泣かないで、天使様。私はあなたと出会えてとても嬉しかった。

神様からこの力を貸していただいて、多くの人のために働きました。愛する人々を癒す事が叶いました。まだ幼い子供達を置いていくのは悲しいけれど、私は神様と天使様に感謝しています」

少女が願っているというのに、悪魔は涙を止められなかった。何度も経験した痛みが、新しい傷と共によみがえる。

神の力を授けたせいで、純粹な魂が、救おうとした人間によって殺されてしまう。

「約束する。君の家族を私は見守り続ける。きっと神も許してくださる」

「ありがとうございます」

過去の日は逆に、少女は悪魔を抱きしめて背をなでた。

そして数日後、彼女は人々の涙と嗚咽の中で処刑された。

## 第七話「絶望する者」

「……………私に、他の任につけと、そうおっしゃるのか」

神の命を受け、悪魔は声を震わせた。少女の死を確認した悪魔が報告をすると、神はまったく別の地で仕事をしてくるようにと言った。

「お前はあの娘に想いを寄せすぎる。残した家族に対してもそうだ。禁断の果実に手を伸ばすのを、見過ごすわけにはいかないのだよ。大丈夫、あの少女の魂は楽園へ連れられた」

「しかし、私は約束を」

「それは他の天使にまかせる。良いか、救うべき命は人間、いや、あの娘だけではないのだ。あらゆる命を導く使命を忘れてはならない」

悪魔は長い間うつむいていた。神はそれを静かに見守り、悪魔が返事をするのを待った。やがて悪魔は顔を上げ、神の命を受け入れた。

翌日から以前どおり、人や植物や動物、あらゆる生物の声を聞き、時に励まし、慰め、神との間を繋ぐ役目を果たした。そうしながら、悪魔の心はふさいでいた。少女を失った心の穴を埋められぬまま、時に叫び出したくなる衝動を抑えて働いた。

どうしてあの少女を救えなかったのだろうか。なぜ、何者よりも優しく美しい心を持った少女が、地獄の苦痛を味わいながら殺されな

ければならなかったのだろう。

あの日、少女の願いを聞いて、力を与えたのは自分だ。人間の中では稀少な、あの力を与えるべきではなかったのではないか。農夫の死を、運命として受け入れさせなければならなかったのでは？

そうすれば、救った相手に殺されることはなかった。

なぜ、人は人を殺すのだ。感情のままに殺してしまうのだ。真実を見れもしないクセに、それが許されると思うのだ。

あれは救うべき魂の資格を持った生物なのか？

あらゆる生物の魂を救うために必要なのは、人間を滅ぼしてしまうことじゃないのか。

悪魔はそこまで考えて、慌てて首を振った。

神を疑うのか。人間を否定するのか。あの少女や少女の家族やその村の人々、これまで出会った多くの優しい人間たちまで、なかったことにする気が。

幾度も繰り返し問答を続け、悪い結論に違うと叫び、悪魔の心は日に日にひび割れていった。少女の死から一ヶ月たった頃には、自分が今何をしているのかさえ、定かではなかった。

礼を言う声も耳に入らないのに、顔だけは笑っている。神に喜びを報告し、次の任に就く。砕けそうな心を抱えて、偽りの平安に身を置いて、ようやく気持ちが悪く落ち着くまでに、半年かかった。

少女の、最期の笑顔を信じよう。

悪魔の心の中で、今も美しい少女が、こちらに笑いかけていた。少女が笑うなら、悪魔も全てを慈しもうと思った。

少女の死から、十ヶ月がたった頃。その事件は起きた。

悪魔の耳に悲鳴が聞こえた。数人の、人間の命が次々消えていくのを感じた。悪魔の視界は赤く染まり、嫌な映像が頭を駆け巡る。

ある村で、善良な一家が惨殺された。豊かではない平凡な家。子供達の将来を思って置いていた金も、全て奪われていた。

一家を殺した強盗たちは、仕事を終わると笑いながらその家を出た。

「楽な仕事だったな。あつという間だったじゃねえか」

「こんなことで大金がいただけるたあねえ。あの奥様も怖い方だ。女一人殺すだけじゃ飽きたらねえとはな。そんなに死んだ旦那を愛していらっしやっただってワケかい？」

「いやあ、あそこのご亭様はとんだ女好きだつて有名だろ。嫉妬でとつくに頭がイカレてたって話だぜ。あの奥様は」

強盗たちの噂話は、無意味なほど乾いて聞こえる。強盗たちとすれ違い、家の中へ入ってみた。



農夫が入り口近くでうつぶせに倒れていた。驚いて逃げようとして、背中を斬りつけられていた。少女の夫は胴と首が離れていた。子供達は奥の部屋へ逃げこみ、すぐに追いつかれて刺されたようだった。農夫の妻はそんな孫達の部屋の前で殺されていた。

「……なんなんだ、これは」

呆然と悪魔はかすれた声を出した。

少女の愛した子供達の顔を、一人一人確かめ、抱きしめてやるが反応は返ってこない。まだあたたかいその体から流れる血液が、悪魔の体にべっとりとついたが、悪魔は気に留めなかった。

羽根が落ちた。一枚、また一枚と、悪魔の背の両翼から。まるで雪のようにひらひらと、穢れない白い輝きと共に。

「神よ。我が主よ。これはどうということなのですか」

抜け落ちていく羽根は血に染まっていく。ぬかるんだ床を絨毯のごとく覆いつくしながら、真紅へ。

「彼等を守る天使はどこに？ それともこの惨状を見守らせたもうたのか」

ああ、何ということだ。神の言葉をもう信じられなくなってしまった。

悪魔の目から涙が零れたが、それは血の色をしていた。耳元で、何かが壊れる音がする。ずっとキシキシ音を立てていたものが、完全に砕けてしまっている。

「あなたは何をどう救いたいのだ。地獄のような恐怖の内に殺されてしまう彼等や、動物や、他の生物たちの気持ちはどうなるのだ。善良に生きるモノを、なぜお救い下さない」

そこまで言ってから、悪魔は驚愕した。血の海に映る己の姿を食い入るように見つめた。

「私は見返りを欲していたのか」

神に人の行いを報告し、人に神の意思を伝える役目を持った天使に、あるまじきことだ。

昔、あの子供が崖から落ちた時も、動物達が遊戯として殺される様も、少女のことも、こんな気持ちになるのは自分の行いに対して見返りが欲しかったからだ。自分の望む結果、働いた分だけの良い効果を。

悪魔は声を出して笑った。ひたすらにおかしかった。

故に、神を恨んだのか。神の思し召すまま働いた自分に、良き結果だけを与えはしない神を、憎悪するのか。

なんと醜悪な魂だ。誰も恨まず天へ旅立った少女に比べ、どこまでも汚い。天使と呼ぶには穢れすぎているではないか。

悪魔は剣を手にした。それは忌まわしき悪魔と対峙する時のみ使われる、唯一の武器であった。それを右手で持ち、自らの背にまわすと、左手で押さえた両翼の根元から一呼吸で切り落とした。

焼けるような苦痛を感じたが、目の前の惨状と己の浅ましさが、悪魔の心を焼いていた。

悪魔の両翼は、あれほど絶える事のなかった光を失いながら散らばった。子供たちの体を、優しく床に並べて寝かせ、悪魔は膝をついたまま前を向いた。

祭壇があった。少女の家にあるのではない。悪魔の心の中の景色だった。

その祭壇の上に、黒い髪に黒いスーツの男が、やはり片膝をついてうずくまっていた。

悪魔は男へと手を伸ばした。男はゆらりと体を起こし、悪魔を見た。笑った。自信に溢れた笑みだった。男の紫の瞳と目が合うと、悪魔の意識と体が崩れていくので、思わず叫んだ。

言葉にならぬ叫びと、男の微笑む両目と、崩れいく己の体と、見えるものがめまぐるしく変わり、悪魔の意識はぷつんと切れた。

「私は私を殺す事を望んだ。私が私を生かし続ける事は叶わぬからだ」

血の海に沈んだ羽が、毒々しい動きで集合し、塊へと変わっていくのを見下ろした。

祭壇の上の男の背に、翼が生える。男は立ち上がり、塊に向かって話を続けた。

「天使を殺した私は、その大罪により天から追放されるだろう」

塊は形をさらに変えて、生き物の姿を現した。男の背の、真紅の翼と同じ色を持つ鳥の姿へと。鳥は男の下へと飛んで、差し出された腕にとまった。姿は鷹に似ているが、明らかにこの世の生物ではなかった。

その証拠に、鳥は耳障りの良い女の声で言語を話した。

「我が主よ。天使がこちらに近づいておりますが、いかがなさいますか？」

「さて、どうしてやろうかな」

男は一度目を閉じて、開いた。かつて天使だった体も、今は神の呪縛から解き放たれて、押しつぶされそうな想いもいっそ心地よかった。

背後に気配を感じて、男は、いや、誕生したばかりの悪魔は薄く優雅に笑んだ。

「あ、あなたは……」

「やあ、遅かったな」

振り返る悪魔の顔を見て、さらに天使は信じられないという表情で後ずさった。天使はここにいる悪魔の顔を知っていた。一家を守るよう神から命じられていた天使は、前任者である悪魔と、神の御前で会っていた。

反対に、悪魔は悲しみに沈みきっていたため、天使の顔や名前を

記憶していなかった。が、それは重要度の低いことだ。相手の固有名詞を知らずとも、その任務が何であったか想像がつく。

「悪魔へと堕ちられたのか」

「誕生の瞬間に立ち会えず、残念だったな。ここの様子を見ていたのではないのか？ ああそうか。先に偉大なる我らが神に、ご報告に行かれたのか」

「私への皮肉は甘んじて受けよう。しかし、神を愚弄される事だけは許しがたい」

思えば、悪魔は天使の頃に、眼前の天使のように神を侮辱する言葉に対して、これほど激怒できただろうか。そこまでの愛を、神に持っていたのだろうか。

おそらく、元々悪魔は、こちら側に向いていたということだ。

「神は彼等を見捨てるとおっしゃられたのか？」

「人の行いに手出しできぬ決まりを、忘れておられるわけではないでしょう。それはたとえ、神が選んだ聖女の家族とて同じ事。今彼らを助けても、人の世でこれ以上平穩に暮らすことは叶わない。神はそれにいたく同情され、死した魂を天へと拾い上げられたのです」

「天使は神の命なくば、指先一つ動かせぬもの。哀れな愛玩人形だな」

天使は何も言わずに剣を抜いた。悪魔はそれを見ても眉一つ動かさなかった。

「哀れな愛玩人形は、哀れな死者の体を踏み砕きながら戦うつもりかな？」

からかうように言っていると、天使はひるんだ。二人の間にある、哀れな人間たちの亡骸を、傷付けるわけにはいかない。また、傷付けずに倒せるほど、この悪魔はたやすい相手ではない。

「偉大なる神に伝言をしていたかどうか」

「……無礼なことならばお断りする」

「天使に断る権限はないだろう。あらゆる出来事を包み隠さず報告するのが天使という存在だ。それに、悪魔になる以上の神への侮辱など、ありはしないしな」

腕にとまっていた鳥は、悪魔の肩へと移動した。鳥の喉をくすぐってやりながら、悪魔は世間話の口調で言った。

「私、いや、俺は、自らの醜悪さに気付いて墮天したのであり、神を否定したわけではない。ただ、天使としての正義と、あるべき姿が異なっただけなのだ。結果的に天使を殺したことを詫げる」

「なっ……」

「そう、伝えてくれ」

悪魔は闇の中へと一步後退した。

「待て！ そんな戯言を信じろと言っのか」

「おそろく神は、お前とは別のことを感じ取るだろう。お役目ご苦労。では、縁があればまた会おう。先ほどまでの同胞よ」

品良く一礼をした悪魔は、今度こそ闇の中へと溶けた。

魂を求めず願いを叶える悪魔の噂が、天使たちの中で囁かれ始めるまで、さらに百年の月日が流れていった。

## 第八話「破る者」

カラスは悪魔を可哀相だと思った。「自分以上に可哀相な存在」を、初めて目の当たりにした。涼しげな表情から見て取る事はできないが、その傷は癒えるものではないはずだ。

同時に、胸のあたりで何かが蠢いていた。とても嫌な感じがするが、それが何かは理解できない。

そんなことよりも、である。

「大変だったんだな。辛い事を話させてしまった」

「なに、嫌なら話さなければ良いのだから、お前がそうして気にしなくていい。俺の体験を聞いて、お前の望む理想のお前に一歩でも近づけるのなら、何よりだろう？」

悪魔の紫の瞳が、かすかに揺れた。いつも通り不遜な態度を見せてはいるが、まだ当時の傷が癒えていない表情をしている。

その儚さに、カラスの何かが口を開かせる。

「悪魔はそこまで私のことを考えてくれているのか。なぜそこまでしてくれるんだ。私のような脆弱な精神力しかない存在に」

「お前が望んだからだ。約束は守る。泣いて訴えたお前の真実を俺は信じているんだ。その願いを叶える為ならば、お前にさえ嫌われる覚悟を持っているよ」



「私はあんたを嫌ったりはしない。絶対にだ」

「それなら俺も、幸福だな」

悪魔の名に似つかわしくない、無邪気な笑顔が愛しいと思う。カラスは新しい決意が自分の中で生まれたのを感じた。

私が悪魔を守ってやる。この優しい悪魔を罵る全ての無理解な者から、ずっと、ずっと、命ある限り。

カラスは誇らしい気分になった。今まで無力だと卑下してきた自分が、どこか変わった気がした。使命を持って生きるとは、これほどまでに自信を持たせてくれるものなのか。

悪魔がカラスの願いを叶えてくれるように、カラスも悪魔の役に立てることが嬉しい。

悪魔はティーポットに残った三杯目のお茶を、慎重にカップへと注ぎ、おそらく渋くなっているだろうそこへミルクを入れた。一杯目は香り、二杯目は味、三杯目はミルクを入れて楽しむらしい。そこでやっと思い出したという風に、悪魔は言った。

「カラス、お前に一つ約束をしてほしい」

「何だ？」

「今日教えた話は、あまり他人に言わないでほしいんだ。聞いて幸せになれる話でもないし、何より簡単に話していい内容ではなくてな。話が広まって、私の居場所が神に忠実な天使たちに見つかったら、せつかくの平穩が台無しだ」

「そうか。分かった。誰にも言わないと約束しよう」

初めて悪魔から頼みごとをされたカラスは、興奮を抑えてうなずいた。そんなカラスを見つめる悪魔の瞳が、瞬間的に苦笑を浮かべたが、カラスは気付かなかった。

悪魔は約束を守る代わりにと、ほんのわずかな悪魔の力ではあるが、カラスに与えてくれたのだった。

悪魔の評判は、当たり前だが良くなかった。猫は話しかけにくいと言っし、スズメは何だか怖いと言っ。

「そんなことはない。悪魔はとっても良い奴なんだ。悪魔といっても、助けを必要としている者たちを救おうと頑張ってる」

「それがウソで、騙して魂を奪うとかじゃないのか？ 悪魔って願い事と引き換えに魂を要求するんだろっ？」

ゴミ漁り仲間の猫は、遠くで使い魔の赤い鳥と話している悪魔を、ちらりと見た。じっくり見て見つかつたら、食われると思っているらしい。

カラスはそういう根拠のない常識に縛られた猫に言ってやる。

「なら、悪魔の力をもらった私を、猫は嫌いになるか」

猫の全身が一度、ざわざわと毛を逆立たせる。大きな瞳がさらに

大きく見開かれた。

「悪魔の力をもらっただって！ 正気かカラス」

「正気だよ。私はこの力で皆の役に立ちたいと言ったんだ。そうしたら悪魔が私に与えてくれた。もちろん、無償でな」

「信じられない。どんなことが起こっても知らないぞ」

「悪魔の事をよく知りもしないでそういうことを言うなよ。悪魔は大変な過去を乗り越えて今ここにいるんだ。他の悪魔がひどい奴でも、あの悪魔は違う」

「悪魔の過去だって？ 他の悪魔と違うと言い切れる過去ってどんなだよ」

「それは」

売り言葉に買い言葉。カラスは腹立たしさにまかせて口にのぼりかけたそれを、ギリギリで飲みこんだ。

「それは、言えない」

「ふん。カラスのことは友達だけど、悪魔のことは認められないな」

不機嫌なのはカラスも同じだが、猫はつんとして寢床へと帰って行った。

だが、他の友達も似たようなものだった。誰もがカラスを嫌わなくても、悪魔への偏見を解いてはくれなかった。悪魔と引き合わせ

てもあまり効果はなく、カラスは憤慨した。

悪魔は常に優しくかった。果物などを誰にでも分けてくれたし、ミルクやキレイな水も出してくれた。願いを叶える対象であるカラスには、厳しいところが抜けないけれど、他の者達にはさり気ない気配りもしていたし、悪魔に汚点などなかった。

その悪魔を悪く言う友に対して、カラスは寛容でいられない。

悪魔だというだけで嫌われる姿は、かつての自分を思い出させた。誰もが上辺だけを見て役目を決めて、ついには穢れたモノにしてしまっ罪を知らないんだ。カラスは悪魔にそのことを教えられて、もう知っている。

悪魔は嫌われても傷ついたそぶりはない。そういう目で見られることを熟知しているし、それで誰も困らないのだからかまわないと言う。へたに近寄って不幸になられる方が迷惑だと。

日に日にカラスは我慢ができなくなってきた。

悪魔を守ってやると言ったのだ。今こそ、その時ではないだろうか。

猫や犬やスズメや、他の生物達に向かって言った。

「悪魔は悪い奴ではない。悪魔は元は天使で、辛い想いをして悪魔になったんだ」

悪魔はカラスに言った事がある。

「物事は移り変わり、常に過去が正しいわけではない。現在や未来にそぐわない約束事ならば、訂正や撤回は必要な時がある。臨機応変に動ける身軽さも、また強さと呼べる」

臨機応変で約束を破るのは今しかない。悪魔の理解者である自分しか、カラスの友達に真実を教える事はできないのだから。

村人を救おうと死んだ子供。無残に殺される動物。聖女と出会うまでの様々な不幸の数々。そして、聖女とその家族の死がもたらした、悲惨な結末。

語り終わる頃には、カラスの話に最初胡散臭そうな表情を浮かべていた者達が、しゅんと頭を下げていた。誰もが悪魔の悲しみを知り、その光景を想像し、今の悪魔の優しさに気付いた。

「僕達が悪かったよ。悪魔って本当にいい人なんだね」

スズメが一番にそう言うと、猫や犬たちもうなずいていた。

カラスは満足して悪魔の元へ飛んだ。皆が分かってくれたと、教えてやりたかった。猫とスズメが着いてきて、悪魔はリンゴの香りのする紅茶を飲んでいたが、カラスはかまわず喋った。

すると、悪魔は想像通りに驚いたが、それはカラスが期待した笑顔にはならず、眉間にシワを寄せて睨んできたのだ。

「お前は俺との約束を破り、話したのか」

それを言われると弱い。カラスは事情を一生懸命に話した。全て悪魔のためなのだ。

そんなカラスと悪魔を、猫とスズメはハラハラしながら様子を見守っている。悪魔の怒りに怯え、会話に入れないのだろう。

「俺をかばうためと言うが、自由に俺のことを話す権利がお前にあるのか。お前は約束を守ると言ったし、俺はお前を信じて力を与えたんだ。最低だな、まったく」

「最低まで言わなくてもいいだろう。さっきも言ったが、あんたが嫌われすぎるから、話した方が皆理解すると思ったんだ」

「……お前は自分が正しいと、信じたいんだな」

悪魔は、猫とスズメが緊張しているのを見て、ミルクと水を用意して差し出した。優しく微笑み、猫の背をなでた。

「怖がらせてすまなかった。お前達は何も悪くないのに、目の前でケンカされれば居心地も悪いだろう」

まるで天使だ。猫とスズメは先ほどまでの恐怖も忘れて、美しい悪魔に見惚れてしまった。

猫とスズメを落ち着かせた悪魔は、冷たい瞳でカラスをしばらく見つめたが、やがて小さく息を吐いた。ニヤリと微笑する。

「まあ、いいだろう。済んだことだしな」

自分の手から木の実をスズメにやり、悪魔はカラスの失態を許した。

カラスはほっとして悪魔に謝罪した。

なのに、なぜだろうか。胸の辺りがもやもやとする。先ほどまであんなに悪魔を嫌い、緊張し、恐怖していた猫とスズメが悪魔に懐いている。

自分が悪魔にとって特別な存在であるはずが、猫とスズメにも悪魔が優しいからだろうか。例えば猫が困った事を悪魔に相談すれば、悪魔はカラスに対するのと同じように、全てを投げ打ってでも助けようとするのだろうか。

いや、それともこの感情は別の何かが原因だろうか。悪魔というと常を感じる何か。悪魔の過去を聞いた時から、いつそう酷くせり上がってくる何か。

カラスは知るのが怖かった。悪魔はもう見透かしてしまっただろうか。悪魔はもう、カラスが気付いていないその感情を、深い紫の瞳で読み取ったのだろうか。

カラスは気にしないよう努力して、スズメと一緒に水を飲んだ。

## 第九話「見透かす者」

思えば悪魔は気が長かった。

最初の約束通りの、厳しい悪魔の言葉が辛くなり、幾度も醜く悪魔を罵り、責めた自分を、常に最後は許してくれた。もしカラスが悪魔の立場なら、とくにカラスの願いを放り出しているだろう。悪魔の表面的な態度は優しくないが、自分が気付かないところでも助けてくれている。

カラスは何かあるたびに、悪魔の心の美しさと、自分の醜悪さを比べた。時に顔を見るのも嫌になり、悪魔本人に八つ当たりをしたが、悪魔は微笑んで言うのだ。

「そうやって本心だけを口にしていればいいものを、隠せないなら隠すだけ無駄なんだ。私に腹が立つなら、いつでも、いくらでも言えばいい」

みじめだった。悪魔はカラスを同等に扱うが、カラスは悪魔がたどり着けない雲の上にいるのだ。

みじめな自分を誤魔化すために、カラスは友達をたくさん作ろうと思った。自分の価値を高められる、唯一の方法と信じた。

悪魔は、とても冷たい雰囲気を持っていた。紫水晶の瞳がそう見えるのだ。不遜な態度で、マイペースにお茶を飲んでいる姿も災いする。カラスはカラスの友達に言わなければならぬ。

「ああ見えて、あいつは優しいんだ。確かに多少キツいところはあ



るけれど、あれほど素直な奴もいないくらいだ。でもな、態度が大きいからすぐ誤解されてしまっただけ。フォローするのも大変なんだよ」

「へえ、カラスも大変だな」

「別に。私はあの悪魔が大好きだからな」

そうだ。カラスだって悪魔を助けているではないか。悪魔とて誤解されやすいのだから、カラスが守ってやらなければ嫌われ者になってしまう。

これはお互い様なんだ。ああそれに、社交性のない悪魔の面倒を見てるのは自分じゃないか。

ならば、世話をしているカラスの願いを聞いてくれてもいいだろう。人の役に立ちたいという素晴らしい願いを、断る理由がどこにある。礼儀礼儀とうるさいが、悪魔こそ礼儀がなっていないのではないか。

「お前は、価値観というものが万人共通だと、思いたくて仕方がないんだな」

「私の友達にまで大きな態度でいるお前を、なんとか良く見てもらいたいだけだ」

「それはこの俺が、お前の友達に、何か失礼なことをしているということか？」

していないとも思っているのか。それとも、悪魔こそが自分が

正しいと「思いたくて仕方ない」だけだろう。

カラスは不機嫌に悪魔を見やった。

「ならば、その友達に謝罪をしておこう。誰が怒っていたのか、教えてくれ」

「皆だ。皆。皆が言ってる」

思わず偽ってしまった。本当は誰も言っていない。カラスが愚痴をもらすのを、ただただうなずいて賛同しているだけで、「そうは見えないのにね」「優しいと思ってたのにね」と、残念がりながら悪魔を褒めるのだ。

悪魔は、動揺して慌てふためくカラスに、くつくつと笑った。

「その皆に、俺が謝罪すると言えば、お前はとうするつもりなのだろうな？」

カラスは硬直した。見透かされている。どこまで？

「お前、俺が何も知らないと思っっているのか、それともこれも、思いたいのか。どこまでも愚かな事だ。お前はなぜ、自分の長所を見ようともせずに、他者を貶めて成り上がろうとする。その心に、美しい光は存在しているのに、自ら光が洩れないようにと閉ざす」

「うるさい！ そんな光なんて私にはない。ないものをあると行って、私を惑わし、私に迷惑をかけ、私より悲しい過去があるのを口にして、私から甘えることを奪い、力だって少ししか与えてくれないから、結局今までと変わらない」

以前に感じた嫌な気持ち鮮明になっていく。特別なものになりたいのだ。誰からも必要とされる自分に、なりたいたけだ。もがいて、戦っている自分は、これ以上なく頑張っているではないか。

報われない。不幸な自分。汚い自分。どうしても逃れられないものを抱えて、必死に生きているのだから、幸福を与えてくれて良いはずだ。

身の内に、暗い炎が灯っているのを、カラスはついに自覚しようとしなかった。

悪魔は罵倒されるままに罵倒され、嘴で体中を突付かれようと、最後まで抵抗ひとつしなかった。

## 第十話「怒る者」

カラスがつけた体中の傷は、元々肌の露出部分が少ない服装のため、目立たないようだ。普通の人間なら、痛みで無様な動きになるところだが、悪魔はいつもとまったく変わらず、優雅にティーカップを口に運んでいた。

きっと普通の生物ではないから、痛みも感じないのだろうし、傷も早く癒えるのだろう。カラスは決め付けて、罪悪感を羞恥心と共に放り出していた。

今はそれどころではないのだ。

黒猫が情けない顔をして、すっかりしょぼくれていた。この黒猫とは最近知り合ったのだが、人間たちから忌み嫌われるという共通点から、カラスは親しみを感じていた。なので、黒猫の悩みを聞いてやろうとしている。

「子供が生まれた。可愛いと思う。でも、どう愛していいか、僕にはわからないんだ」

飼い猫だった母親に育児放棄され、飼い主にも兄弟たちと共に捨てられた。通りすがりの人間たちが、時々兄弟を連れて帰る。黒猫は、ただ寂しくて悲しくてお腹がすいて、ずっと鳴いていた。けれど、黒猫だけは誰にも助けられる事はなかった。

どうやって生きて来たのか、今となっては思い出せない。夢中で生にしがみついて、ただ死にたくなかった。人間にイジメられる事もあった。他の猫に噛み付かれた事もある。それでも黒猫は一匹

で生きていた。

「愛された事がない。だからどう愛したらいいかわからない」

カラスは言っっちゃった。

親になったんだ。可愛いと思ってるんなら、遊んでやればいい。可愛いと言っっちゃればいい。簡単じゃないか。私も昔はそのやり方がわからない時期もあったが、自分で頑張っつて、人に親切にする事を覚えたんだ。私が力を貸してやるから大丈夫。あんたももつと自信を持てよ。頑張れ頑張れ。

思いつく限りの言葉でカラスは励ました。慰め、時に悪魔のマネをして厳しい意見とやらを言っつてみたりもした。しかし黒猫は、ずっと、いつまでもうなだれていた。

カラスは苛立っつて、黒猫を悪魔のところへ連れて行っつた。

「どうも黒猫は相当困っつているようなんだ。何か言っつてやっつてはくれないか」

「俺はかまわないが、黒猫の気持ちはどうなんだ？俺に何か言っつて欲しいと望んでるのか」

「望んでるから連れて来たんだ。なあ」

黒猫は素直にうなずいた。翡翠の瞳が、じつと悪魔を見つめた。

「それはどこまでの望みだろう。慰め、励まし、意見、苦言もあるかもしれない。先に選んでくれ」

悪魔の決まり文句だ。悪魔は簡単に相談に乗らなかつた。普通は自然にそうなつていくだろう話を、先に選ばせるのだ。

悪魔は言う。

悩んでいるから意見が欲しい者ばかりじゃない。だが、本当は意見を望んでいる者もいる。ならば、自分の苦しみを他者に手助けさせて解決しようというのだから、最低限の責任は負うべきだ。つまり、選択を。

黒猫は目を丸くしてから、全てと答えた。そしてカラスに話したように、悩みを悪魔に打ち明けた。カラスからすれば、もう一時間以上もやり取りを繰り返しているのだから、最後には練言になつてしまつた問題だ。悪魔がどう意見するのか興味があつた。

「言いたい事は、それで終わりか？」

「う、うん」

「では言わせてもらおう」

「うん」

「黒猫、お前はバカだな。お前の悩みはくだらない」

と、悪魔は黒猫の前にミルクの入つた皿を差し出した。黒猫はその皿に気付かないほど驚いた顔をした。悩みで暗くなつていた影さえ、身を潜めるほどに。

悪魔はくすりと微笑んだ。

「お前の過去は不幸だ。悲しく、辛かっただろう。だが、愛を知らないと思っ込んでいるだけだ」

「そんな事は……」

「ないとも？ では、お前が妻と屋根の上でデートをしていた時、それから夫婦になった時、愛は欠片も存在しなかったとも言うつもりか」

「あ……」

「知らない事は恥じではないが、お前は知らなかった過去を恥じているだけで、今は愛情を知っている。子供たちを愛していると言っただけではないか。あの小さきモノを思え。守ってやりたいと思うのだから。まずは、自分が愛情を知っていると、自覚するといい」

「自覚。うん、そうだな」

心臓が痛む。カラスは呆気に取られながら、それを感じた。あれほど沈んでいた黒猫が、姿勢良くまっすぐに悪魔の意見を聞き、励まされているのだ。カラスが時間をかけて話しても変化は一度もなかったというのに。

悪魔は黒猫をそっと抱き上げると、膝の上にのせた。優しく黒猫の背をなでてやりながら、悪魔は子守唄のように語る。

「自覚をしたら、後は簡単だ。お前がして欲しいと望んでいた事をし、お前がされて嫌だった事をしなればいい。子供に教えるため

に、あえて試練を与えなければならぬ時もあるが、間違えたら謝罪しろ。頑張ったら褒めてやれ。嬉しい事をしてくれたら、お礼を言ってみよう

「うん」

「どうだ。お前の悩みなど、あまりにバカらしいだろう。今ある愛を失ったわけではないのに、贅沢な奴だよ」

「不思議だな。あなたにそう言われると、本当に僕の悩みはバカらしいものに聞こえる」

「それはお前が、心の底ではわかっていたからだ。そうだな。その悩みを、妻に話してみるといい。妻との子供なら、お前と妻の二匹で考えていけばいい。喧嘩になる事もあるだろうが、それさえ幸福に思えるように、頑張れ」

「うん」

黒猫は涙を流していた。心に広がっていた汚泥を、その涙で大海へと押し出して、浄化しているようだった。その間、悪魔は黒猫をなで続けていた。

カラスは見ていらなくってうつむいた。悪魔はカラスの欲しいものばかり、奪っていく。真っ黒な悪魔は、真っ白な心を持っている。

カラスはそれを思う時、感じる時、ひどく気持ちが沈んだ。どんな努力も、たやすく叶えるモノの前ではちっぽけで……。



「どうしてあんたばかり。あんたばかり。黒猫は私に相談した時には、ただ落ち込むだけで何も変わらなかった。あんたに話したとたん、浮上した。皆言うんだ。あんたの方が説得力があると」

「お前の嘴は、嘆きの歌ばかりを囀るのだな」

嘆息した悪魔は、不機嫌そうにカラスから視線をはずした。

「何もできなかつたと、なぜ嘆く必要がある。俺と比べる必要もない。お前はお前なりに努力し、黒猫の気持ちを吐き出させてやったじゃないか」

「でも役に立たなかつたら意味がない」

「意味があるかないかは黒猫が決める事だ。お前がすねて、決め付ける事こそ意味がない」

カラスは心が押し潰されそうになった。自分が愚かだと言われるのは痛い。痛みで我慢ができない。

悪魔はカラスの心をえぐるばかりで、ちっとも優しくしてはくれない。

「そうやって、私の言葉を聞こうとしない。私の苦しみを無視するんだ。たまには甘えさせてくれてもいいだろ」

「それならそう言えばいい。いつだってそうしてやる。思うところがあるなら、真正面からぶつけてくればいいんだ。遠慮はいらないぞ」

「ウソだ。あんたは私を否定ばかりして、許さないじゃないか。反論しても、反論される。もうたくさんだ。私は弱いんだ。あんたの言う私にはなれない」

怒りがカラスを支配した。悪魔への憎悪と憧憬が、悪魔からもらった力を増幅させた。カラスは自分が弾け飛んだのではないかと疑った。

悪魔よりずっと小さな体だったはずのカラスは、屋根の上に立ってこちらを見ている美しい悪魔を、空を飛んでもいないのに見下ろしていた。

## 第十一話「晒う者」

独占欲というのは、愛情ではなく、醜悪な気持ちの上にもこそ強く在るのだろうか。

カラスは時々、悪魔の全てを奪いたいと思っていて。他の誰かが悪魔を褒め称えるたび、自分が悪魔に負けるたび、悪魔が残酷なまでに優しい微笑を浮かべるたび。

何より、悪魔が自分以外の誰かの求めに応じて、いつでも助けてやるのが嫌だった。カラスは悪魔の特別でいたかった。悪魔という特別な存在に、一番特別に扱われる事に執着していた。

それなのに、悪魔はカラスの本当の願いを無視した。許せない。悪魔が幸福になればいいと思ったけれど、自分を特別にしないのなら、いつそ孤独に、不幸になればいいんだ。自分の手で、ずたずたに傷付けてやる。

生産性のある行為とは逆。かつて天使である自分に絶望して泣いた悪魔の姿を、自分によって再帰させたいという、暗い情念だ。

悪魔を喰い尽くしてしまいたい。神に愛されているとしか思えない、美しいその体を貪り、啄ばんだなら、どんな味がするのだろうか。それでも悪魔は死なないのかもしれない。カラスごときに肉を抉られたところで、この悪魔なら平然と生きているのではないか。

痛覚はあるようだから、きっと地獄の苦しみも、もしくは快樂さえ与えられる。自分の力で。

「そんなにも苦しいのか、カラス」

恐れもせずに、悪魔はカラスの頬に両手で触れた。悪魔は、今、自分がどんな風に扱われているのかなど、興味はないというのか。口元から流れる紅い雫が、白い肌をつたって喉へと流れていく。煽情的な光景だった。

許すな。もう許さないでくれ。

カラスの中で、先ほどと相反する気持ちが溢れては、悪魔を苛む。

「そうしたいのなら、そうすればいい。俺は、かまわない」

苦痛に歪む顔でさえ美しいのに、心まで澄んでいるのは卑怯だった。

「俺はお前の願いを叶えると約束した時、全ての覚悟をしている。だから、お前が悪いわけじゃない。これは俺の、責任だ」

一番聞きたくない言葉を、一番聞きたくない時に言ったのけるのが悪魔だ。カラスは怒りのままに悪魔を抉る。悪魔は耐えるように小さく呻いた。醜くなれと望む反面、苦痛でさえ己を飾る装飾品の一つにしてしまう悪魔に、自身の翼と同じ色の欲望が疼いた。

助けを求めてみる。許しを請うてみる。泣き喚いて、自分と同じ醜い心を見せてみる。無様に抵抗してくれ。もっと苦しんで。痛がって。

分け与えられた悪魔の力は、カラスの中で好き勝手に暴走していた。気持ちを引きずられ、止まらない。壊れてしまうのも時間の問

題で、それなのに恐怖はない。

死ぬ気もないのに自殺未遂をしていた頃より、よほど恐怖と縁遠かった。

どれほどの時間が経過しただろうか。カラスの足元で、血まみれの悪魔がぐったりと横たわっていた。意識があるようには思えない。生存さえ疑える。

「……悪魔？」

「カ、ラ、ス」

血の気を失って、青白い顔をした悪魔が、紫水晶の瞳にカラスを映した。腐臭さえ放っていそうな自分の姿に、カラスは吐き気がした。

悪魔の、わずかに開いた唇が、喘ぎながらかすかな声をしぼり出す。

「お前は、とても醜悪だ。俺はそれを、よくわかっている。そしてその奥に隠された、希望の光も」

俺はそれを信じている。

砕けないのか。これほどまでに魂を陵辱しきっても、その心は譲らないのか。どれほどの汚辱を与えてやったと思っっているんだ。カラスが吐き出した汚泥で満たしてやっても、何も損なわれない。どぶの中の寶石。

カラスは絶望した。結局汚れているのは自分だけだ。笑うしかない。笑う、汚い声が耳障りだ。

## 第十二話「醜き者」

カラスは思っていた。自分は醜く汚いカラスだから不幸で、そんな自分の中に美しい光があるなど、悪魔が思い込んでいただけだと自分の理想をカラスに押し付け、ヒドイ言葉を浴びせて、無理難題ばかりを望んでくる。

重たい。重くてつぶれてしまいそうだ。

黄昏の空を見つめながら、カラスは疲労を感じていた。カラスの姿は元通り、ただのカラスになっていた。笑い終わって気が付いた時には、無抵抗の悪魔をいたぶった自分はいなかった。

あの後、悪魔を放置して逃げるように飛び去ったのだが、翌日にはまた赤い屋根の定位置で、悪魔は使い魔とティータイムを楽しんでいた。

腹が立つ。

余裕ぶって、賢そうにしているあの悪魔は、身勝手すぎる。カラスを完璧な善人にしようと、無理をさせる。カラスは本当は強くなれると囁いて、その気にさせて羽ばたかせて、休みを与えようとしていないのだ。振り回すだけ振り回しておきながら。まるで、拷問。

自分はただのカラスだ。悪魔の力をほんの少し分けてもらったくらいで、特別なモノになれはしなかった。カラスはどこまでいってもカラスで、悪魔にはなれない。

悪魔が憎い。悪魔が羨ましい。悪魔が恨めしい。悪魔が疎ましい。

悪魔が………。

カラスは鳴いた。助けを呼ぼうと思った。相談をしようと思った。その対象は現れて、見知った相手だった。

「君の願いはすでに知っている。神からの命も受けている。強く強く、嘆いていたからね」

悪魔の友達である天使は、剣を片手に持っていた。長い髪と同じ色をした黄金の鎧と、白いマントを身に付けていた。カラスはそれが気になったが、哀れっぽく嘆き続けてみせた。

悪魔がどれほど厳しいか。悪魔の面倒を見るのがどれほど大変か。悪魔に振り回され、無理やり愛して信じなければならぬのが、どれほど辛い事か。

「そうだね。悪魔はとてもヒドイね。君を苦しめ、望まぬ方へと導こうとしているんだよね」

「この事を話したら、皆も私が大変だと言ってくれてるんだ。悪魔だけが、私を認めない。私の欲しい信頼も好意も、全部奪おうとするだけで」

だって悪魔は、自分が先に出会った人の心も、すぐに連れ去ってしまった。

悪魔の方が頼りになる。悪魔の方が賢い。悪魔は特別で、カラスは口うるさいだけだ。

「私が相談に乗ってやっていたのに、いつの間にか悪魔を頼るよう



になる。悪魔は私と違って特別だから、私がいじめになっっていく」

「うん。だから神は、君の願いを叶えて下さるよ」

「神……が？」

カラスは目を輝かせた。

神様。悪魔より特別な存在だ。その特別な存在が、悪魔よりカラスを思ってくれたのか。なんとありがたく、嬉しい事だろう。

天使は、白く美しい羽を広げた。暗く暮れていく空に、それほども映えた。

「着いてくるといい。直接会いたくないだろうから、隠れて見ていたらいいよ。君の望みが叶うところを」

「ああ、ありがとう」

悪魔には対しては出てこない礼の言葉も、素直に言える。カラスは幸福だった。悪魔が願いを叶えると約束した時と同等に。しかしカラスは、その事実には目を向けようとしなかった。

「けれど、できれば私はもう、悪魔に会いたくない。悪魔は勘がいい。見つかりたくない」

「そうかい？ なら、一人で行く事にするよ」

「これを悪魔に、渡してくれないか」

カラスは天使に、小さな袋を差し出した。紅茶の香りがする。匂い袋だ。

「友達のスズメにもらったものだが、悪魔に使ってほしい。悪魔を一人にしてしまう私には、それしかできないから」

「………わかったよ」

カラスの脳裏に、いつか言われた悪魔の言葉が浮かぶ。

お前は、自分を被害者に仕立て上げ、そのくせ恩着せがましくする事には長けているんだな。

悪魔の元へ行く天使を見送りながら、カラスは息を吐いた。煩わしい悪魔の声。その記憶が薄れるのはいつ頃になるだろう。できれば、早々に忘れてしまいたい。

悪魔が悪いのだから。孤独な悪魔をかまっただけなのに、何も返してはくれなかったのだ。悪魔の、せい。

カラスは猫やスズメたちのところへ向かった。一人でいると悪い方へ考えてしまう。皆といれば、気分も変わるはずだった。

だが、どうしても疑問が羽根を重くする。天使は願いを叶えると言ったが、果たしてそんな事ができるのだろうか。悪魔は拒否するかもしれない。しばらく自分は身を隠した方が良くはないか。大丈夫だろうか。

せめて、願いを叶えてくれる方法を、訊いておけば良かった。

## 最終話「嘆く者」

猫は怯えた声を出して、カラスの前から逃げ出した。スズメも巢に帰っていく。当のカラスは、呆然とソレを見つめていた。

いつもの朝だった。願いが叶ったはずの、爽やかな新しい朝だ。仲間たちとゴミを漁って、世間話をしていた。はず、だった。

もう大丈夫。あの悪魔は天使が追い払ってくれるから。これで楽になるよ。

本当に良かったね。やっぱり悪魔は悪魔でしかないんだね。迷惑してたんだろ？ これからは自由だな。

「自由の証拠を、持ってきてあげたよ」

白い翼は朝の光そのものの美しさだったが、太陽を遮り、カラスたちに大きな影を落とした。

「悪魔がね、これはまったく自分に必要ないから返しておいてくれと言ったんだ。だから、君に返すよ」

「ひっ……」

小さな匂い袋には、紐が通されていて、天使はそれをカラスの首に巻きつけた。袋からは、染み込み過ぎた血液が滴り落ち、コンクリートを点々と汚した。

血に濡れた袋を持ってきた天使の指は、少しも血液が付いていな

い。恐怖に支配されながらも、奇妙にそれが気になった。よく見ると、抜き身の剣の刃も、紅く染まっている。

「悪魔はもう、君の前には現れない。なぜなら、私がこの手で永遠に、葬ったのだ」

「では、では悪魔は死んだのか？ 私があんなに傷付けても平然としていたのに？」

「悪魔の因子を植えつけられた程度のカラスに、悪魔を倒す力などありはしないさ。私にはこの、神から賜った剣がある。悪魔の魂はこの剣でちゃんと砕いてあげたよ」

「天使は、悪魔と友達だったのに、殺したのか」

「おや、私を責めているようだね。見当違いの非難は遠慮したいものだな」

と、天使はおもむろに剣を振って、血糊を落とした。カラスの体に、悪魔の血液が降り注ぐ。

「確かに私は悪魔の友人だ。悪魔が悪魔になって、最初に会った天使は私だった。私は神から命を受け、悪魔を監視する任に就いたのだけれど、長い時をそうしている間に、気心の知れた関係になったんだよ」

「じゃあ、あんたは悪魔の、悪魔になった時の話に出てきた天使なのか」

「いかにも」

「だけど、だけど何も殺さなくても」

「君が望んだのだろうか？ 永遠に悪魔と会いたくないと」

「違う。ここまで望んでなどいない」

「望んださ。もしかして、また他人のせいにしてしまう気なのかな。そつだとしたら、君は悪魔よりも夕チが悪いよ。まあ、そういつた問答は飽きるほど悪魔とただらうから、私は私の仕事を続けさせてもらおう」

悪魔のアメジストの瞳が怖くて仕方なかったが、天使のサファイアの瞳はより恐ろしい。一片の情もない冷たい輝きを放ち、剣の角度を変えた。

カラスは一步後退したが、何ほどにもならない。それ以上の派手な逃走をしてみせれば、瞬時に斬られるだろう。かといって、このままでも悪魔と同じ末路がある気がした。なぜ？

「まさか私を、私まで！？ 悪魔なのか？ あいつが望んだのか？」

「悪魔は自分が消えてカラスが幸福になるならいいと、笑っていたぞ。君が、もう二度と孤独にならないためならと、悪魔は抵抗さえしなかった。しかし、悪魔も君の性質を熟知し、君がいつか破綻を望む可能性が高いと考えていたはずなのに、よくもまあ、頑なに約束を守ったものだな。呆れるよ。なのについて、君を悪く言うモノたちから、庇い続けた」

「……嫌だ。死にたくない。死にたくない。殺さないで」

「私は悪魔ほどたやすくはない。君の嘆きが哀れだとは、髪の毛の先ほどにも感じない。君は君に似合いの場所で、永遠に嘆いているといい」

カラスは叫んだ。恐怖を叫んだ。悪魔が残した悪魔の力が、体を貫いてふくれていく。再びカラスは力を目覚めさせていた。天使は面白そうに笑った。

「醜さを極めるか。愚かなカラス」

「うるさい黙れ。天使などといって、どうして弱きモノを消し去ろうとするんだ。いつも、誰もがそうだ。私を否定して、私を貶めて平気で笑うんだ」

「君は常に誰かを悪し様に言ってきたではないか。猫の悪口、スズメの悪口、短い時を過ごしただけのツバメの悪口。数え上げればキリがない。自己防衛のためだと言えば聞こえはいいが、最早、君の不幸な過去と釣合わぬほど、君は腐りきっている」

簡単に押し倒され、喰らわれてくれた悪魔とは違った。天使は身動き一つしてはいないが、見えない防壁で容赦なくカラスを傷付けた。痛みで涙が溢れてくる。

世界はひどい。カラスを醜い生き物にして、助けてもくれない。皆に好かれるように頑張ったのに、頑張りさえ認めてくれない。

「ああ、そうだ。言い忘れていたよ。君が私に殺されるのは、君の心が醜いせいじゃない。君が、悪魔の眷属だからだ」

「私は悪魔になんてなりたくなかった。悪魔なんかじゃない。私は

カラスだ」

「力を分け与えられたじゃないか。ほら、今の姿はそのためだろう？」

「だって、強くなりたかつたんだ。特別な力を持つていれば、皆に好かれると、大事にされると思ったから。悪魔が悪いんだ。私を惑わして力を押し付けた」

必死に言い訳をしていると、天使は腹を抱えて笑った。もう話す必要を感じなかった。天使は神より賜りし剣を、カラスの姿形を失った異形の怪物へ向けた。

天使は直接カラスを攻撃しなかった。何かしらの呪文を唱え、カラスの背後に巨大な門を召喚した。黒よりも暗く、不気味な色の門は、音もなく開いた。

「君はどこまでも愚かだ。一条の希望を自ら捨て去ったのだから」

「うるさい、うるさい、うるさい、うるさい、うるさっ!?!」

門から無数の腕が伸び、無数の手がカラスをつかんだ。カラスの肉に食い込もうと、血が出ようと、手はカラスを力の限りつかんで放さない。言葉にならぬ悲鳴をあげ、最後にカラスは天使に救いを求める視線を送った。

天使はにこやかに微笑んだ。

「さようなら、嘆きのカラス。地獄へ墮ちるがいい」

特別なものとは何だろう。大切にされるとはどういう事だろう。さ迷える魂はいつも嘆くのだ。

誰か私を愛して欲しいと。

誰かを愛せないカラスは、自分を嫌いだと嘆く事で、自分を愛しつくした。それはいつそ、特別で強烈な自己愛。

嘆きを囀る黄昏のカラスは、暁に溶け、消えていった。そして今は地の底で、嘆く事さえ許されず……。

\*\*\*\*\*  
E N D  
\*\*\*\*\*



## 「鴉と悪魔」のこと

はじめまして、勝月かじきです。

ここまで読んでいただいた方、本当におおきに、ありがとうございます。  
ます。

ここから読まれている方、うっかりネタバレあるかと思いますが、  
お暇な時にご自由に楽しんでくださると光栄です。

さて、なんとというか、今まで友達しか寄ってかないようなブログで、  
自作小説なんぞをUPしていたのですが、こういうところは本当に  
初めてなので、緊張しますね。

しかも、高校生以来、むちゃくちゃ久しぶりの、鬱小説！

普段の私はというと、もっとコメディ要素の入ったファンタジーだ  
の超能力ものだのを書いてまして、シリアスな下地があるうと、ど  
こか笑えたりする話ばかりなんですけどね。

そのせいか、どうしても暗い艶みたいなのが、今回の鴉と悪魔で  
出ませんでした。

こっぴどく色気とか、艶っぽさとか、耽美というか？

ちよこつとでも書けたらいいなあと思ったものは、すっぱりと出ま  
せんでしたね。

これを書いたことで、自分にそういうものを求める気が、またゼロになってすっきりです！

いえ、負け惜しみでなく。

この「鴉と悪魔」、ブログで公開している方では、シリーズもの  
二話目にあたります。

が、一話目と続いているわけじゃないので、まったく独立した話としても読めるんですね。

もちろん、シリーズを意識した最後の部分はカットしましたが、実はその方がより鬱っぽくていいなど、個人的には思っています。

自分にしてはちゃんと鬱だよと、自己満足ですが。

小さい頃、カラスに関係する童謡の可愛らしさが好きでした。

小学生の頃、でもカラスって実際はそんな可愛くないよなと気付きました。

中学生の頃、しかしカラスも黒いだの、声が悪いだの、不吉だの言われてちよつと可哀想だなと思いました。

その結果、カラスはできるだけ嫌わないでおこうと思ってきたので

すが。

今回、こんなカラスでごめんなさいカラスさん！

だけど、カラスと悪魔を使って書きたかったんですね。

第一話あたりの場面が、一番最初に頭に浮かんでから、どうしてもバッドエンドが書きたくなったというか。

カラスという存在を借りて、いやらしい人間の部分を書きたくなつて。

同時に、カラスのいやらしさが際立つような、風変わりな悪魔も。

この悪魔が、なかなか難しかったです。

いい人そうに見えないのに、話してみるといい奴で、作者的にはさらに裏側に、それでもやはり悪魔だという部分を埋め込みたかったわけですよ。

結果的に、カラスは不幸になるんですから。

あと、悪魔の容姿やカラスの異形について、もう少し詳細に書いても良かったんですが、そこら辺は読み手が自分の好みで想像してもらっていいかと。

手を抜いたわけでなく！

(言い訳がましい・・・)

カラスがキレて異形になるあたりのシーンも同じですね。

ホラーばりにグロくてもいいし、もう少し色っぽい風になってもいいし。

どっちにしろ、年齢制限入りそうな表現は避けてみました。

私の場合、グロく書けたとしても、色っぽいようにはどうせ書けないんですが……。

なんにしろ、それでも話す悪魔の根性とタフさが恐ろしいです。

さすが人外が存在。

というわけで、あとがきまで読んでいただき、ありがとうございました。

私は小説家を目指しているわけでもなく、本当にただの趣味で小説を書いているだけなので、稚拙な文章ではありますが、少しでも楽しんでいただけたら本望です。

一応、次回は版權ものをUPできたらいいなと思っておりますが、できるだけ原作を知らない方にも読めるように努力しています。

時間が余った、とてもお暇な時にでも、のぞいてみてくださいませ。

では、ここまでお付き合いありがとうございました。

月。 2007/12/12

友情のためにKAT-TUN勉強中の勝

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1416d/>

---

鴉と悪魔

2010年12月3日06時07分発行